

追補1

元禄時代における品井沼干拓への取組

吉田川、鶴田川は品井沼に注ぎ込み、そこからは小川^{こがわ}を通じて鳴瀬川に流れていたが、大雨や洪水時には鳴瀬川が増水して品井沼に逆流し、大規模な水害をもたらしていた。

品井沼の干拓は、藩政時代に既成田の水害防止と新田開発を目的に、穴川や浦川の拡幅、潜穴（トンネル）の開削、鳴瀬川の逆流防止工事を仙台藩直営工事として、元禄6年（1693）7月9日に着手（鍬立の式）された。完成は元禄11年。同年12月25日、松山領主の茂庭周防^{うじもと}元は次男^{もとしげ}の元威に134貫848文（約1348石）の品井沼新田を与えて、平渡村に分家している。

元禄15年6月、仙台藩は直轄を解き、この品井沼一帯の土地をふたたび茂庭家に引き渡した。完成後からの5年間は、新しい土地の整理、農民の耕作割当、水路の敷設などの準備期間とされた。このとき開発された新田は、617町歩と言われている。

なお、茂庭元威が平渡の屋敷に居住するようになったのは、藩の直轄が解かれた後の元禄16年からである。以来、この茂庭家は現在に続いている。

●工事の内容●

① 北部平堀の開削

延長：沼の内～明神崎穴頭までの960間（1,754m）

幅：3～5間（5.45～9.09m）

深さ：3尺3寸（1m）

② 潜穴工事

本数：2連

延長：幡谷村明神崎穴頭～根廻村山王穴尻までの1,418間（2,578m）

幅：2間（3.6m）

高さ：8尺（2.4m）

③ 南部平堀の開削

延長：根廻村山王穴尻～磯崎浜海岸までの1,688間（3,065m）

※当時浦川と呼ばれていた小河川を拡幅

幅：10間（18.2m）

深さ：3尺5寸～7尺（1.06～2.12m）

④ 小川閘門の設置（小川と鳴瀬川の合流点）

<小川改修工事の内容>

- ・竹谷～二子屋までの鳴瀬川堤防の嵩上げを行うとともに、二子山の山根に潜穴4条を掘り、その穴口（小川）を鳴瀬川に合流させ、逆流防止の閘門（4扉）を設置。 竣功：元禄11年（1698）

【小川閘門について】

小川閘門は、明治 39 年に改修され、扉も 8 枚となった。その後、明治 43 年 12 月に明治潜穴が完成し、品井沼の水が高城川を通じて松島湾に注ぐようになってその役割を終え、大正 2 年に扉は取り外されている。現在、扉は鹿島台小学校の校門扉として、閘門の礎石は校舎前のカヤの木を囲む石として保存されている。

とはいえ、「大正八年度 品井沼開墾地作付一覧図」では小川水門として表示があり、また「昭和 4 年 品井沼開墾地平面図」からも認められるように、小川は二子屋と諏訪山のすそを抜け、鳴瀬川に合流していたことから、昭和 4~5 年ころまでは閘門の遺構があったと推測できる。それが完全に姿を消すのは、吉田川が幡谷のサイフォンを越えて、鳴瀬川に沿って石巻湾側に新川開削されていく昭和 7 年以降のこととなる。

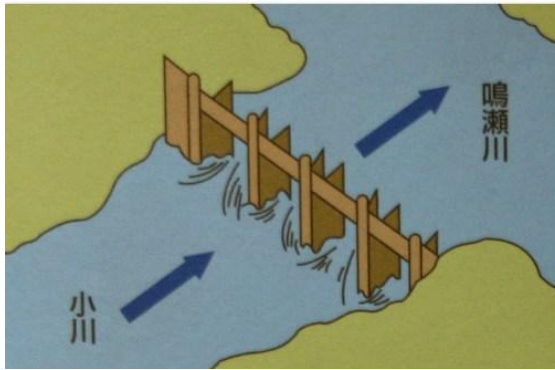


▲大正八年度 品井沼開墾地作付一覧図 (鎌田三之助展示室所蔵)

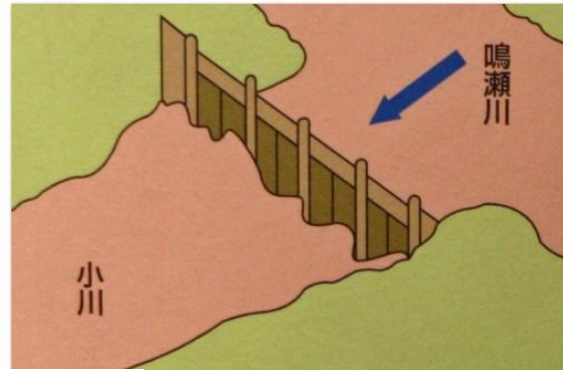


▲昭和 4 年 品井沼開墾地平面図 ※出典：品井沼干拓抄誌

沼の水が多いとき



鳴瀬川の水が多いとき（逆流を防ぐ）



▲小川閘門の仕組み 出典：鎌田三之助展示室



▲現在の吉田川・鳴瀬川と小川閘門の位置



▲小川閘門があった場所の現在の様子
中央クレーンのあるあたり（手前は吉田川）